

家庭内におけるコミュニケーション能力の育成をめざした小学校家庭科の授業実践

Learning of Communication with Family in Home Economics Education in Elementary School

鳥井 葉子*, 宮本 美姫**

*〒 772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島 748 鳴門教育大学 生活健康系 (家庭) 教育講座

**〒 772-0017 鳴門市撫養町立岩字内田 73 精華幼稚園

Yoko TORII*, Miki MIYAMOTO**

* Department of Health and Living Sciences Education (Home Economics) Naruto University of Education
748 Nakajima, Takashima, Naruto-cho, Naruto-city, Tokushima 772-8502, Japan

** Seika Kindergarten

73 Uchida Tateiwa Muya-cho, Naruto-city, Tokushima 772-0017, Japan

抄録: 家庭内における児童のコミュニケーション能力の育成をめざし、小学校家庭科で「自分の気持ちを率直に伝える大切さに気づき、生活に生かそうとする態度を身につける」ことを目的とした授業実践を行った。その結果、ほとんどの児童が家族を対象としたコミュニケーションの生活実践を行い、事後調査におけるコミュニケーションの正解率も高かったため、授業で取り上げたコミュニケーションスキルは児童に定着したといえる。コミュニケーションスキルを活用できなかった児童に対する支援・指導の工夫が今後の課題である。

キーワード: 小学校家庭科授業, コミュニケーションスキル, 家族, 生活実践

Abstract: This report analyzed the effect of learning of communication with family in home economics education in elementary school. The learning items were awareness of importance of communication and to get practical attitude. The results were as follows: 1) Most of students practiced on communication with family in their lives. 2) Level of post test of students on communication was high. 3) Learning of communication with family in home economics education was proven to be effective. The problem to be solved is to support for students without practice on communication with family.

Keywords: Learning in Home Economics Education in Elementary School, Skill of Communication, Family, Practice in Life

I. はじめに

今日家族や社会の変化に伴い、地域社会や家族間での人間関係が希薄化し、子どものコミュニケーション能力が低下していると言われる。学校では環境に適應することができず、集団生活に馴染めない児童が増加し、家の外に出れば他人とどう接すればいいのかわからないという子どもも多い。こういった児童のコミュニケーション能力低下の背景には様々なものが考えられるが、特に、家族間での人間関係の希薄化が深刻な影響を与えていると考える。他人と上手くコミュニケーションをとるためには、家庭内でのコミュニケーション能力が基礎となる。しかし、現代の児童の中には、家庭内で自己中心的な行動をとったり、家族に自分の意見を言えなかったりする子どもがおり、家庭内において十分にコミュニケーショ

ン能力が身に付いているとは言えない現状にある。

そこで本研究では、家庭科教育において家庭内での子どものコミュニケーション能力の育成をめざした小学校家庭科の授業プランを考え、授業実践し、その効果を検討する。

II. 方 法

1. 授業実践対象クラス(徳島市内の小学校5年生37名)の児童を対象としたコミュニケーションに関する事前調査(2004年12月上旬)
2. 家庭におけるコミュニケーション能力の育成をめざした小学校家庭科の授業実践(2004年12月20日)と分析
3. 家庭学習課題とした生活実践の分析およびコミュニ

ケーションに関する事後調査（2005年1月11日）による学習効果の検討

Ⅲ. 結果と考察

1. コミュニケーションに関する児童の実態

2004年12月初旬に実施した授業実践対象クラスの児童の事前調査結果を述べる。回答は32名から得られた。

(1) 生活実態

児童自身も含めた兄弟について質問したところ、一人兄弟が3名で、2人兄弟が21名、3人兄弟が8名と、ほとんどの児童は兄弟姉妹がおり、兄弟姉妹がいない児童の方が少ないというクラスの実態であった。また、回答した32名全員が両親と一緒に暮らしていた。祖父と暮らしているのは8名で全体の25%、祖母と暮らしているのは6名で全体の約20%いた。そのうち、6名が祖父母と共に暮らしている。3人兄弟もおり、兄弟姉妹数が多いクラスの実態が窺われる。また、拡大家族の世帯が8組いることから、核家族の世帯は少なくとも24組はいることがわかる。

塾や習い事について質問した結果が図1である。塾や習い事に「行っている」児童が29名で、「行っていない」児童は3名であった。その頻度は図2に示しているように、「ほとんど毎日」「週に5、6日」と答えたのが13名で、

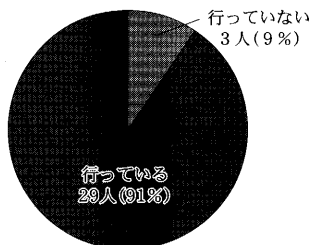


図1 塾や習い事の状況

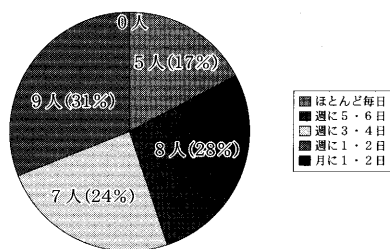


図2 塾や習い事に行く頻度

表1 家の手伝いの頻度 (人)

	ほとんど毎日	週に2、3日	週に1日程度	月に1、2日	ほとんどしない
名数	9	12	6	1	4

表2 親と話す機会 (人)

	ほとんど毎日	週に5、6日	週に3、4日	週に1、2日	ほとんどしない
母と話す機会	31	1	0	0	0
父と話す機会	16	5	6	2	3

塾や習い事に行っている児童の中の45%を占めていた。これらから、このクラスの児童たちが塾や習い事に追われ、非常に忙しい毎日を送っているということがわかる。

また、家の手伝いに関する質問の結果が表1である。ほとんどの児童はある程度手伝いをしていたが、「月に1、2日」「ほとんどしない」と答えた児童が5名いた。理由を自由記述からみると、「面倒くさいから」「手伝いをする機会がないから」「する暇がないから」が挙げられており、「する暇がないから」と答えた児童は、ほとんど毎日塾や習い事に行っていた。忙しさ故に、家庭で自分の役割を果たす機会が奪われている児童が見受けられる。

(2) コミュニケーションの実態

1) 親と話をする機会と家族との共通体験の機会

表2は親と話をする機会について尋ねた結果である。

母親とは、ほぼ全員が毎日話す機会があったのに対し、父親は母親と比べ大幅に話す機会が少なかった。話の内容を自由記述から見たところ、母親とは学校の出来事や興味のあること等、様々な内容について話しているようであるが、父親とは「テレビのチャンネル争いをするだけ」や「何も話さない」と答えている児童がおり、全体を見ても母親よりは話題として挙げられていたものが少なかった。父親が単身赴任や出張等で在宅時間が少ないという可能性も考えられるが、それにしても母親との差が激しい。話をする機会が少ないにしても、児童たちの方から積極的に話す機会をもととする姿勢が必要である。

また、家族とどこかへ出掛けたり、一緒に何かしたりする等の共通体験の機会に関しては、「月に1回以上」が22名、「2、3カ月に1回」が5名、「年に2、3回」が3名、「ほとんどない」が2名であった。一部の児童は少ないが、児童全体では共通体験の機会が多いことがわかった。

(2) 家庭の雰囲気

家庭の雰囲気や様子について質問した結果を図3に示す。「家庭があたたかくない」と思っている児童が5名(16%)おり、「家族全員仲がよくない」と思っている児童が8名(25%)もいた。家庭に対するイメージが暗い児童が数名いることが見受けられる。一名でいるときが一番好きだと感じている児童も「とてもそう」「まあそう」を合わせると44%と高い比率になっている。家庭内での個別化の現れであろうか。全体を見てみると家庭に対するイメージはよいようであるが、暗い部分も少なくなく、家族の絆が非常に強いとは言い難いであろう。また、授業をするにあたり、ここで最も着目すべきなのは、「みんなが自由に意見を言える」と「何でも相談し合える」という項目で、「あまりそうでない」「全くそうでない」と答えた児童が全体の約3割もいたことである。自分の考えや気持ちについて上手く伝えることができていない児童が多いという実態が見える。自分の気持ちを相手に伝える大切さについて理解させ、伝え方を指導する必要がある。

あるであろう。

(3) 親への意識

親と話す機会では父母間に大きな差が見られたが、「親をどう思っているか」に関する質問では、父母に対する思いに大きな差は見られなかった。父親と母親が「好きだ」、「気持ちをわかってくれる」等、ほとんどの項目でどちらも同じくらいの比率となっている。母親を好きだと感じているのが30名、父親を好きだと感じているのが27名と、どちらも大部分の児童が親を「好き」であると思っていた。しかし、数名の児童は父母を「あまり好きでない」「全く好きでない」と答えているおり、それらの児童の他の質問項目に対する回答をみると、話す機会の有無はそれぞれの児童でばらつきがあるが、どれも親と児童の会話で対立があったり、行き違いがあったりと、会話ややりとりで問題があることがわかった。ここから、家族との不和は、会話の機会の有無よりも、会話ややりとりで問題が生じることによって引き起こされることがわかる。児童たちが家族とよい関係を築くためには、相手と上手に会話ができるようにする必要があるであろう。

(4) 家族とのかかわり方

家族とのかかわり方について質問した結果を図4に示す。それぞれの項目において「いつも自分の好きなようにふるまう」で「とてもそう」「まあそう」と答えた児童が17名で53%、「よく相手を怒らせたり、いやな気持ちにさせたりする」で「とてもそう」「まあそう」と答えた児童が14名で44%、「いつも家の人の気持ちを考えて行動している」で「あまりそうでない」「全くそうでない」と答えた児童が12名で38%、「意見が対立したとき、相手の気持ちも理解しようと努める」で「あまりそうでない」「全くそうでない」と答えた児童が14名で44%であった。これらから、家族の気持ちになって考えることができず、自己中心的な傾向にある児童が多いことがわかった。また、「どう接すればいいかわからないときがある」で「とてもそう」「まあそう」と答えた児童が8名で25%もいた。家族とのかかわり方がわからないときがあるのは、問題であると言える。特にこのような児童において、コミュニケーションスキルを獲得させる必要があるであろう。

親と対立したときにどのように解決するかという質問に対する結果を図5に示す。「親の意見に従う」が13名で41%、「自分の意見を押し通す」が6名で19%、「お互いが納得するまで話し合う」が12名で37%となっていた。(資料7、参照) どうやら、親が「勝つ」家庭が最も多いようである。しかし、納得するまで話し合う家庭が多いのは、よい傾向であると言える。ところで、「自分の意見を押し通す」と答えた6名について家族とのかかわり方を見てみると、「いつも自分の好きなようにふるまう」で「とてもそう」「まあそう」と答えた児童が6名中5名(84%)と、全体と比べかなり高い割合になってい

た。「どう接すればいいかわからないときがある」で「とてもそう」「まあそう」と答えた児童も、2名(34%)と、これも全体と比べ少し高い割合になっていた。対立したとき、意見を押し通す児童にはやはり自己中心的な傾向が見られ、そのような児童は他者の気持ちを理解しにくいからか、家族とのかかわり方がわからないと感じることがあるようである。クラスの実態として、自己中心的な傾向にある児童が多いということから、家族とのかかわり力をつけるためにも、相手の気持ちを考えて接することの重要性について理解させる必要があるであろう。

これまで家の人と一緒にしてきたことの中でうれしかったことや嫌だったことに関する質問も行った。児童のうれしかったことは、そのほとんどが「～したらほめてくれた」「～してあげたら『ありがとう』と言われてうれしかった」「家族で一緒に～へ行って楽しかった」等の内容であった。共通体験をしたときや、相手から自分に好意の念が行動として表わされたときに「うれしい、楽しい」と感じているようである。ほとんどの児童がそういった経験をもっているのだから、授業では、他者理解の視点として「相手にも感謝の気持ちやうれしい気持ちを伝えると喜んでくれる」ことを理解させたい。

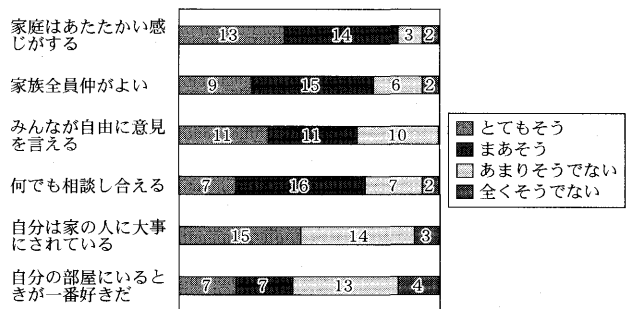


図3 家庭の雰囲気

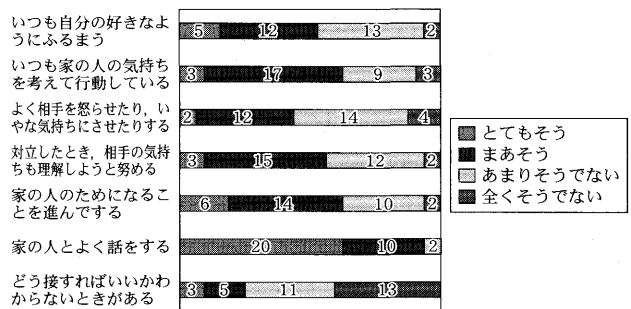


図4 家族とのかかわり方

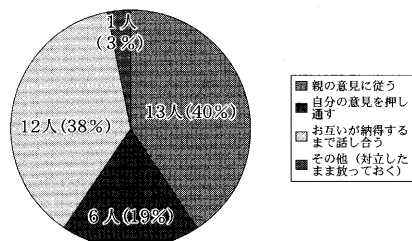


図5 親との対立の解き方

家族とのかかわりの中でいやだったことは、「～を注意されていていやだった」「いちいち～と言われる」「いつも～しなさいと言われる」等、わかっていることを口うるさく言われたり、行動を規制されたりすることについての内容が多かった。また、「自分が言った言葉で家族を傷付けてしまった」「言った言葉の意味を取り違えられた」等、会話上で上手くいかなかったことについて挙げている児童も何人かいた。言葉の行き違いはよい人間関係を築く妨げになる。授業においては、相手を傷つせず、しかもわかりやすく伝えるよう指導したい。

以上の事前調査結果から、児童の家庭におけるコミュニケーションの実態はおおむね円満であると思われる。しかし、自己中心的な傾向にある児童や、家族の気持ちを十分に考えることができていない児童がいるという実態が浮かび上がってきた。また、数名の児童においては会話が上手くいっていないことから家族との不和を招いていると考えられる。授業では家庭での会話が上手くいくよう、具体的な指導を行う必要がある。児童が自分の気持ちを大切にしながらも、相手の気持ちを考えることができるようにしたい。また、家庭像や親に対してあまりよい思いを抱いていない児童への配慮も必要である。

2. 授業実践

(1) 授業プラン

現代では、児童が社会性を身に付けるために大切な場

である家庭において人間関係の希薄化が生じ、他者と人間関係を築くのが苦手の児童が増加している。事前調査により、このクラスの児童の実態として、自己中心的な傾向にある児童が多いこと、家族の気持ちを認め受け入れられる態度が十分でないこと、家族との接し方がわからないときがある児童が一部で見受けられること、会話のまづさから家族と上手くコミュニケーションをとることができていない児童がいることがわかった。

これらの実態にもとづいて次の視点から授業を設計した。児童が家族に対して上手く気持ちを伝え、自分も相手も尊重したよい人間関係を築いていくためには、児童たちに自分の気持ちを上手に伝えるために、親業の「わたしメッセージ」を取り入れ、児童たちが相手の気持ちも考えながら自分の気持ちを率直に伝える方法について理解し、ロールプレイングや練習問題を通してコミュニケーションスキルを体得することができるように表3に示す学習指導案を作成した。授業のねらいは「相手に自分の気持ちを率直に伝える大切さに気づき、生活で生かしていこうとする態度を身につける」である。表4は授業資料である。

(2) 授業経過と分析

表5に授業経過を示す。表6は授業で用いたワークシートである。また、授業に対する児童の(反応や意識の変化をワークシートの記述から分析する。

1) 母親の言葉が異なる2つの会話(ワークシート間1)

表3 学習指導案

時間	児童の活動	教師の支援	評価
5分	1 日常生活においての家族とのやりとりを想起し、本時のめあてをつかむ。 ○自分の気持ちを上手に伝えよう。	1 事前アンケートの結果を伝え、実生活での家族とのかかわり方と結びつけることで、問題意識をもつようにする。	○本時のめあてをつかむことができているか。 (態度)
25分	2 テレビと宿題をめぐる親子の会話についてペアでロールプレイングをし、登場人物の気持ちや会話の変化に気づき、自分の気持ちを上手に伝える方法を理解する。 ○相手を非難しない。 ○自分の気持ちを正直にわかりやすく伝える。	2 登場人物になったつもりで考えるよう助言することにより、親子両方の気持ちを捉えながら、その変化に気づくようにする。	○気持ちや会話の変化に気づくことができているか。 (ワークシート・発表)
10分	3 意見が対立しやすい表現と、自分の気持ちが上手に伝わる表現について理解し、自分の気持ちが上手に伝わる表現を使って、場面に応じた言葉を考える。	3 資料で、自分の気持ちを上手に伝える方法の使い方を確認することによって、場面に応じた言葉を実際に自分で考えることができるようにする。	○自分の気持ちを上手に伝える方法を理解して使うことができているか。 (ワークシート)
5分	4 自分の気持ちを率直に表現することの大切さに気づき、家庭で実践してみようとする意欲をもつ。	4 今後、家の人とかかわりの中で、うれしいことや困ったことがあった時に、どのように自分の気持ちを伝えたらよいか考えるよう促すことで、家庭で実践しようとする意欲をもつことができるようにする。	○自分の気持ちを上手に伝える方法を、実生活に生かそうとしているか。 (態度)

表4 授業資料

<p>★意見が対立しやすい表現</p> <ul style="list-style-type: none"> ○音楽の音を小さくしろ! ○音楽の音を小さくしないと、お父さんに言いつけてやるぞ。 ○音楽の音も小さくできないなんて、まるで赤ちゃんみたいだね。 ○どうして音楽の音を小さくできないの? ○音楽の音を小さくしてくれないなんて、あなたは王様でもなったつもりなんじゃないの。 	<p>★自分の気持ちが上手に伝わる表現</p> <ul style="list-style-type: none"> ○「わたしは、あなたに～されると・・・だから、悲しいなあ。」 ○「あなたが～すると、・・・だから困ってしまうよ。」 ○「あなたが～していると・・・できないからいやだなあ。」 ○「あなたが～してくれと、・・・な気持ちになるからうれしいよ。」 ○「～してくれてありがとう。・・・だから、うれしくなっちゃうよ。」
--	---

授業の中では、ワークシートの間1で①と②の会話の変化を見ることで自分の気持ちを上手に伝えることの大切さを感じ取らせた。

まず、①の母親の言葉が強制的で児童を非難した言い方になっている会話の方をみる。この会話の末尾に児童がつけ加えた「わたしの言葉」の内容は、その反応の仕方によって大きく2つに分かれていた。母の言うことを聞かない「反抗型」と、母の言うことに従う「従順型」である。反抗型と従順型は、母親への直接の反応である「わたしの言葉」上で従うか従わないかの違いはあるが、「わたしの気持ち」を見てみると、どちらもかなり類似していた。反抗型の児童にしても、従順型の児童にしても、会話中の母親に対して全員が同じような思いを抱いたようである。「勝手に決めないでほしい」「わたしの気持ちなんてわかってないくせに」「言われなくても自分できる」等と、児童は自尊心を傷付けられ反抗的な気持ちになったり、理解されていないと感じたりしている。いずれにしても、嫌な気持ちであることに間違いはないであろう。

次に、②の母親が「わたしメッセージ」を用いている会話を見る。この会話の「わたしの言葉」の内容は、その反応の仕方により大きく4つに分かれていた。母親の言葉に対しすぐに行動を変える「即刻行動変容型」、後で宿題をすることを母親に伝える「計画説明型」、母親の言うことを聞かない「反抗型」、母親の言葉に対し行動を迷う「葛藤型」である。そのうち、ほとんどが「即刻行動変容型」と「計画説明型」であった。「わたしの言葉」も「わたしの気持ち」も、①とは明らかに違うことがわかる。反抗型と葛藤型を除くと、ほとんどの児童が素直な反応を示していた。①では反発した児童も、素直に母親の気持ちを聞き入れている。①の「わたしの気持ち」では、反抗型にしても従順型にしても、「気持ちをわかってくれない」、「勝手に決めないでほしい」、「お母さんなんて嫌い」等と嫌な気持ちだったのが、②では「わたしの気持ちをわかってくれている」、「自分のことは自分でしよう」、「お母さんの気持ちを考えよう」と、正反対の内容になっていた。②では母親の「わたしメッセージ」により、自分が理解してもらっているという安心感が生まれ、児童が自分の行動に対する責任感をもち、相手を思いやることができている。授業中、児童たちの発表をまとめた板書でも、①と②の「わたしの言葉」と「わたしの気持ち」の変化は明らかであったので、児童たちも口々に言葉を発して驚いていた。①と②でこれほどの差が生じたことから、これらの会話の例は児童たちに対し、言葉かけの違いで相手の反応が大きく変わるという気付きを与え、会話の例としても適していたと言える。また、ロールプレイングを行ったことは児童たちにとって、親と児童両方の気持ちを味わい、それを体験することによってお互いの気持ちについて考えることができる機会になったと考えられる。この授業において、児童たちは相手の視点

に立ち、自分の気持ちを上手に伝えることの大切さを感じ取ることができたであろう。

しかし、②のわたしメッセージを用いた会話でも、「反抗型」が2人と、「計画説明型」のうち「わたしの気持ち」が「心配なんてしてくれなくていいのに」と反抗的だった児童が1人いた。この授業は、自己受容と他者受容についての学習をしていない状況で行ったので、このように、相手の気持ちを知っても自分の気持ちに固執し、相手の気持ちを断固として受け入れようとしない児童が見られた。このような児童にコミュニケーション・スキルを身に付けさせるためには、先に児童の自己受容と他者受容を深めておく必要がある。「葛藤型」の児童については、自分の気持ちを優先させるべきか、母親の気持ちを聞き入れるべきか、自分の中で葛藤があるようである。自分の気持ちも大切にしながら相手の気持ちを考える具体的な手だてを与える必要がある。また、①と②の会話で、②だけ「わたしの言葉」と「わたしの気持ち」を書くことができていない児童が1人いた。その児童の①の部分を見ると、自分の家庭に当てはめてかなり具体的な内容を記しており、授業の感想にも「毎日、母には①のような表現をされる。」と記していた。②のような表現を親にされた経験がないために考えることができなかったことや、①に対し感情的になって詳しく書き、時間を費やし過ぎて時間が無くなったことが考えられるが、この児童は問1の会話を自分と母親の会話に当てはめて考えてしまったようである。活動に入る前に自分の家庭に当てはめて考えなくてもよいことを強調しておく支援の必要があるであろう。

2) 授業の感想

コミュニケーションスキルの理解度について、クラス全体としては、「自分の気持ちを伝える方法についてよくわかった」という意見が多かったことから、ほとんどの児童はこの「わたしメッセージ」をある程度は理解できたことがわかる。しかし、感想の中に「難しかった」と書いてある児童が2人おり、少数ではあるが、このような児童に理解を助けるような支援を行う必要がある。

次に、この授業で達成されたと考えられるねらいについて見ていく。この授業のねらいの1つは、「相手に自分の気持ちを率直に伝える大切さに気づく」ことである。感想をみると、「改めて、自分の気持ちを上手に伝えるのは大事だと思った。」「気持ちの伝え方に違いがあると結果が正反対になっていることがわかった。」「言葉によって相手の気持ちが変わるから気をつけたい。」等、それぞれで自分の気持ちを上手に伝えることの重要性に気づいているようであった。もう1つの授業のねらいは、「生活で生かしていこうとする態度を身に付けることができる」ことである。感想には、「色々な状況になったときに、この方法を使い、相手の気持ちを考えていきたい。」「ぼくの家でもよくけんかをするので、この方法を使って克

表5 授業の経過

時間	教師 (発問, 指導, 支援, 行動等)	児童 (反応, 活動等)
導入 5分半	T:「(事前アンケートの結果を読み上げて) みなさんも家へ帰ったら家族の一員です。そんな中、アンケートであったように、自分勝手にふるまったり相手の気持ちを考えなかつたりすると、他の家族はどう思いますか。」 T:「そう。嫌な気持ちになりますね。みなさんは家族の一員ですから、自分の気持ちを相手に伝えたり、相手を思いやったりすることはとても大切です。でも、自分の気持ちが上手く伝わらなかつたら、相手を嫌な気持ちにさせてしまいますね。そこで、今日は自分の気持ちを上手に伝える方法について学習していきます。」	S1:「不機嫌になる。」 めあて確認 <u>自分の気持ちを上手に伝えよう。</u>
展開 8分	(ワークシート配布) T:「1番の問題を見て下さい。(問題文を読み上げる。)では、始めて下さい。」 (机間指導) T:「今から、となり同士で台詞を読み合ってもらいます。母かわたしか役を決めて読み合った後、役を交代してもう一度読み合います。最後のわたしの台詞には自分が書いた台詞を当てはめて読んで下さいね。それを2通りの会話の両方します。ここで大切なのは、役になり切ることです。自分がお母さん、わたしになったつもりで読んで下さい。では、始めて下さい。」	2通りの母子の会話を読み、わたしの台詞と気持ちを書き込む。
6分半	(机間指導) T:「みなさん、とても役になり切ってくれていたと思います。では、これから代表のペアに発表してもらいます。発表したいペアはありますか。」 指名する。 わたしの言葉とわたしの気持ちを板書していく。	(口々に)「えー！」と言うが、となり同士で積極的に読み合う。
18分	T:「これと違うという人。わたしの言葉と気持ちだけでいいです。」 板書していく。 T:「では、②の会話を前ですべてくれるペアはいませんか。」 指名する。 板書する。 T:「では、これと違うという人いませんか。」 板書する。 T:「今、これだけの意見が出ました。わたしの言葉と気持ちは、①と②を比べてみてどうですか。」 T:「全然違いますね。①と②も、同じ会話から始まったのに、最後のわたしの言葉と気持ちがこんなにも変わるんですね。じゃあ、どうしてこんなに変わってしまったんですか。」 T:「そうですね。①の方が言い方がいやらしいね。きついね。」 T:「②はお母さん、優しいね。」 T:「どうやら、この会話の大きな違いは、お母さんの伝え方に違いがあるようです。みなさん、お母さんを演じたとき、『わたし』に何を一番伝えかけたんですか。」 T:「どうして?」 T:「そう。(伝えたいことは)宿題をしてほしいのと、心配しているということですね。じゃあ、①と②の黒板に貼っているお母さんの言葉を比べてみて、どちらの方が、その気持ちがよく伝わってきましたか。」 T:「①と思う人。」 T:「②と思う人。」 T:「①は、わたしを心配していることが伝わってきません。むしろ、わたしがむつとするような言い方をしていますね。」 「②は『心配なのよ』と気持ちをきちんと言っている。しかも、このように理由も付け加えてわかりやすい。」 「②の方がお母さんの気持ちがよく伝わってきます。では、①と②の会話を参考にして、自分の気持ちを上手に伝えるにはどうしたらよいと思いますか。」 板書にまとめる。 <u>自分の気持ちを正直にわかりやすく伝える。</u> T:「そう。カッとなって相手を悪く言わない。相手を悪く言うと、嫌な気持ちになってしまいます。」 <u>相手を非難しない。</u> (資料配付) T:「自分の気持ちを上手に伝える方法について知りました。では、実際にどう使ったらいいか見ていってみましょう。資料を見て下さい。(資料を見ながら)上半分は、こういう言い方をすると相手を嫌な気持ちにさせてしまったりします。(下半分は②の母の言葉と照らし合わせて説明)」「それから、うれしいときにも使えます。アンケートでもたくさんの方が書いていましたが、してあげたことを言葉で返してくれて、またうれしかったということがありました。自分がうれしいときに相手に言葉で返してあげると、相手の人もまたうれしくなるんですね。」 「では、3の問題をして下さい。」 T:「時間がないので解答の例を言います。(例を言う。)	「やったあ!はい!はい!」と口々に言ってたくさんの子どもが挙手する。 S2,3:前へ出てロールプレイングする。わたしの言葉「はいはい、わかりましたよ。宿題を終わらせればいいでしょ!」わたしの気持ち「怒っている。なんでもかんでも決めないでほしい。」 S4:わたしの言葉「わかったよ。すばいいいんだろ。うるさいなあ。」わたしの気持ち「いやな気持ち。勉強する気にならない。」 S5:わたしの言葉「もう。あの番組見たかったのになあ。嫌やなあ。」わたしの気持ち「お母さんのこと、きらい。」 「はい!はい!」と口々にたくさんの子が挙手する。 S6,7:前へ出てロールプレイングする。わたしの言葉「うん。もう少し見たら宿題するよ。」わたしの気持ち「お母さんが心配しているから早く宿題をしよう。でも本当は見たいけど。」 S8:わたしの言葉「はい。じゃあ、今から宿題してくる。」わたしの気持ち「テレビは見たいけど、心配してくれているから、お母さんの気持ちに答えてやるようにしよう。」 「全然違う!」 S9:「①は母親の言い方がいやらしくて、②は優しい言い方。」 (口々に)「うん、きつい。」 「優しすぎる!」「こんなん言う人おらん!」「てゆーか、どちらも極端!」 (口々に)「宿題をしてほしい。」「テレビを消してほしい。」「早く寝てくれ。」 S10:「体調が悪くなるから。」 (口々に)「右!右!!!」 誰も挙手しない。 全員が挙手する。
4分半	<u>自分の気持ちを正直にわかりやすく伝える。</u> T:「そう。カッとなって相手を悪く言わない。相手を悪く言うと、嫌な気持ちになってしまいます。」 <u>相手を非難しない。</u> (資料配付) T:「自分の気持ちを上手に伝える方法について知りました。では、実際にどう使ったらいいか見ていってみましょう。資料を見て下さい。(資料を見ながら)上半分は、こういう言い方をすると相手を嫌な気持ちにさせてしまったりします。(下半分は②の母の言葉と照らし合わせて説明)」「それから、うれしいときにも使えます。アンケートでもたくさんの方が書いていましたが、してあげたことを言葉で返してくれて、またうれしかったということがありました。自分がうれしいときに相手に言葉で返してあげると、相手の人もまたうれしくなるんですね。」 「では、3の問題をして下さい。」 T:「時間がないので解答の例を言います。(例を言う。)	S11:「理由も付けて言う方がわかりやすいと思う。」 S12:「カッとならない。」 まとめをワークシートに書き込む。
終結 3分	T:「今日は、自分の気持ちを上手に伝える方法について学習しました。自分の気持ちを、相手のことを考えながら伝えるということは、とても大切なことです。アンケートでも、お家の中で嫌だったことや困ったこと、うれしかったことについてたくさん書いてくれました。じゃあ、今度から家の人や友達との間に困ったことやうれしいことがあった場合、自分がどうやって気持ちを伝えたらいいか考えながら、この方法を是非使ってみて下さい。」 宿題の説明をする。 T:「では、感想を書いて終わらしましょう。」	ワークシートに感想を書く。

表6 ワークシート

家族の中のわたし

年 組 ()

今日のめあて

1、次の2通りの会話は、わたしとお母さんとのやりとりです。2人の気持ちを考えながら、空いている「 」の中に言葉を入れてみましょう。また、「 」と答えた時のわたしの気持ちも書いてみましょう。

宿題を終えていないけれど、ずっとテレビを見ているわたしに対して、お母さんが・・・

① 母：「あら、ずっとテレビを見ているけど、宿題は終わったの？」

わたし：「・・・まだだよ。」

母：「え？まだ？！それじゃあ、何でずっとテレビなんて見ているの!？」

わたし：「別にいいじゃない、わたしの勝手だよ。」

母：「テレビなんて、宿題が済んでからよ！今すぐテレビを消さない!！」

わたし：「いやだよ！この番組見たいもん!」

母：「聞き分けのない子ね。今すぐテレビを消さないと、もう2度と見せないわよ!」

わたし：「

② 母：「あら、ずっとテレビを見ているけど、宿題は終わったの？」

わたし：「・・・まだだよ。」

母：「そう、まだなの。テレビがおもしろくて、宿題をする気にならないのね。」

わたし：「うん、そう。宿題をしないとイヤなのはわかってるんだけど、どうしてもテレビがおもしろくて・・・。」

母：「なるほど、どうしてもやめられないのね。でも、あなたが宿題をしないでずっとテレビを見てると、宿題をするためにねる時間がおそくなってしましうし、そのせいで体調が悪くしてしまわないかと、心配で仕方がないのよ。」

わたし：「

↓

わたしの気持ち

↓

お母さんの気持ち

2、自分の気持ちを上手に伝える方法についてまとめよう。

3、次のような状況になった場合、自分の気持ちを上手に伝えるために、どう言えばいいですか。

- 勉強しているのに、弟がふざけてきて困ってしまったとき。

- お父さんが、たん生日プレゼントにほしい物をくれて、とてもうれしいとき。

4、今日の授業を受けた感想を書きましょう。

5、自分の気持ちを上手に伝える方法を、家の人に試してみよう。日付、使った人、使った時の状況、言った言葉、相手の反応、その時の自分の気持ちについて書きましょう。
(家の人に使う機会がなかったら、友達など家の人以外でもかまいません。)

日付	使った人	使った時の状況	言葉	相手の反応	自分の気持ち
(例) 12/20	姉	姉にいやなことを言われて、つらい気持ちになった。	お姉ちゃんがそんなことを言うと、ばかにされた気がして、とてもつらい気持ちになるよ。	「ごめんね。」とすぐにあやまってくれた。	すぐにあやまってくれたから、気持ちが楽になった。

こうすると相手をおぼろげにしないし、自分の気持ちがよく伝わるね。



服したい。」家族とどう接したらいいかよくわかった。これからこの方法をいっぱい使いたい。」等とあった。「わたしメッセージ」を自分の家庭でも使っていくという意欲が見られる。これらより、自分の気持ちを上手に伝えることの重要性に気づき、実生活で生かしていくとする態度が多数の児童から見られたため、授業の目標はほぼ達成できたと言える。

他にも見られた感想では「自分の気持ちについて考えることができてよかった。」「今までの自分を振り返って、これからは気持ちの伝え方を工夫したい。」等、自分の気持ちや考えについて見つめるきっかけになったという内容のものがいくつかあった。「わたしメッセージ」について学習することが、自分の気持ちを伝えるために自分自身を見つめたり、これまでの自分について振り返ったりする機会になったと考えられる。自己受容の基盤となる自己概念の形成を助けることにつながったと言える。また、他に「これまで相手のことを考えたことがなかったけれど、これから使う言葉を考えていきたい。」「相手の気持ちについてよくわかった。」等、他者の気持ちを考える機会になったり、他者の気持ちを理解しようとしたりする内容のものもいくつかあった。ここから、他者を理解し、受け入れようとする態度が一部の児童には身についたといえよう。他に「いつも家で対立している理由

がよくわかった。」等と、自分の家庭での問題の原因を明確化できていた児童がいた。その家庭での問題を解決することができるよう、具体的なコミュニケーションスキルについて今後も指導する必要がある。

以上、授業実践から児童の理解度やねらいの達成度についてみた。多くの児童が感想で「よくわかった」と書いており、授業のねらいもほぼ達成されたので、親業のコミュニケーションスキルは、内容を易しく教えると小学生にも十分理解できるということがわかった。課題としては、家族の人間関係ということでプライバシーの問題があるため、さらに配慮が必要であるということである。今回の授業でも自分の家庭での状況を思い出して嫌な気持ちになっている児童が見られたので、児童のプライバシーに関してさらなる工夫が必要である。また、理解度の低い児童への支援や固定観念の強い児童への指導についても検討する必要がある。

今回の授業は小学校5年でわたしメッセージの基本について学習した。発展として6年生において考えられるわたしメッセージの学習で、理解が浅い部分を丁寧に取り上げて理解を深めたり、わたしメッセージの使い方を詳しく指導したりする等の内容が考えられる。

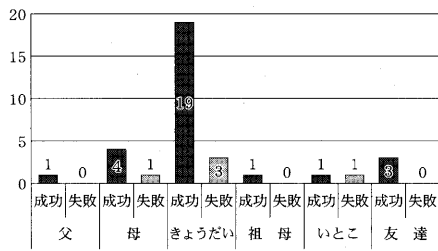


図6 生活実践と成功・失敗感

3. 生活実践および児童の変化

(1) 生活実践

家庭学習課題として児童が冬期休業中に実践した内容と成功・失敗感を図6に示す。成功したのが29名で85%、失敗したのが5名で15%である。ここから、わたしメッセージを活用した場合の成功率は高いと言える。兄弟を対象に実践していた児童が多かったということもあり、兄弟での成功人数は他の成功人数と比べ、かなり多い。今回の生活実践においては、多くの児童で兄弟との関係が良好になっていた。兄弟では喧嘩をした場合に用いている例が多く、わたしメッセージを活用したときの気持ちには、「すぐに謝ってくれたので、すがすがしい気持ちになった。」「いつもは謝ってくれないのに、謝ってくれてびっくりした。」「きちんと謝ってくれたので気持ちがすっきりした。」「すぐ反省してくれたのでうれしかった。」「いつも言うことを聞かないから、言うことを聞いてくれてよかった。」等の内容がみられ、上手く行って驚いたり、相手の行動を変えることができ気持ちが楽になったりしていた。兄弟以外に用いた場合に成功した例を見ても、「気持ちが楽になった。」「いい言葉と言われると気持ちがいい。」「上手く行ってうれしい。」等とほぼ同じであった。児童は生活実践してその効果を実感したようである。

次に、失敗した児童について、その原因を見ていく。失敗した5名のうち、母親を対象として失敗した児童は、母親にひどい言葉で叱られたため、「そんなふうに言われても反省する気にならないよ。」と言って失敗し、嫌な気持ちになっている。この言葉を見ると、「そんなふうに」と説明が不足しており、相手が自分に及ぼす行動についてわかりにくい。しかも、「反省する気にならないよ」という言葉が母親を刺激したため、また厳しい言葉で返されたと考えられる。わたしメッセージを上手に使用できていないことが原因である。兄弟を対象として失敗した例では、けんかで「そんなことされたら悲しくて嫌になっちゃうよ。」と言ったら、「気持ち悪い。ばかじゃない。」と返されて嫌な気持ちになっている。これは、授業の資料で示したわたしメッセージを自分の言葉に直さず、そのまま用いたため、相手にとって不自然な言葉に聞こえたためであると考えられる。資料の表現にこだわらず、自分の言葉で使用するよう指導するとともに、わたしメッセージの使い方について練習する時間をもっととる必要がある。他に、兄弟の例でわたしメッセージを上手

く活用できているにも関わらず「あ、そう。」と言われただけで上手くいかなかった児童がいた。上手く活用できていても、相手の対応に問題があれば会話が上手くいかないこともある。このような児童に対しては、すぐに効果が上がらない場合もあることを理解させ、相手に根気強く接していくことが大切であると指導する必要があるであろう。あと残り2名は、どちらも「うるさい!あほ!」や「ボケ。」といった攻撃的な表現をしていた。これではわたしメッセージであるとは言えず、当然相手との関係はさらに悪化している。このような児童にはわたしメッセージを活用する意欲が見られず、自分の見方や考え方に固執して態度を変えようとしないう姿勢が窺われる。まず、自己受容と他者受容を深め、わたしメッセージの方法と使用方について理解させ、さらに、活用しようとする意欲を高める必要がある。

児童は、どのようなときにわたしメッセージを活用しようとしているのであろうか。この生活実践では、次のような結果であった。相手の言葉に傷ついたり、喧嘩をしたり等、相手と対立したときに活用した児童が29名で85%、自分が困ったときに相手の行動を変えるために活用した児童が2名で6%、自分の隠していたことを相手に伝えるために活用した児童が1名で3%、相手に頼み事をする場合に活用した児童が2名で6%であった。ほとんどの児童が相手と対立したとき、自分の気持ちを伝えるために活用している。それだけ、他者とコミュニケーションを行う上での対立場面が多いのであろう。しかし、授業では親子の対立場面を取り上げたために、対立した場合にのみ活用すると思いつている児童がいる可能性もあるので、授業では、自分に問題をもつ場合であれば、様々な場面に用いることが可能であることを伝える必要があるであろう。また、わたしメッセージはうれしいときや感謝しているとき等にも活用できることを授業で触れたが、生活実践でこれをしている児童は一人もいなかった。問題を解決するために活用するのは重要なことであるが、相手との関係をよりよいものにするために、自分のうれしい気持ちも相手に積極的に伝える必要があることを理解させたい。

以上が生活実践から見えた授業の効果である。生活実践をした児童のうち、その大多数がわたしメッセージの素晴らしい効果を自分自身で確認している。成功率が85%とかなり高いことや、成功した児童が全員わたしメッセージの良さを述べていたことから、児童はある程度コミュニケーションスキルを獲得することができたと考えられる。この授業は児童のコミュニケーション能力を高めるのに効果的であったと言えよう。しかし、生活実践の内容を細かく見ると、成功している児童でも、一部でわたしメッセージの使い方が不十分な児童が見受けられた。授業ではわたしメッセージを理解する部分に時

間をかけ、使い方の部分で丁寧に指導することができなかったため、実際に上手に活用するまでには至らなかったであろう。どの生活実践からも、他者を思いやろうとする姿勢は窺われたが、やはり生活実践でより確かな効果を得るためには、先に児童に上手に活用できるだけの力を身に付けさせなければならない。上手に活用できていない児童に対して一人ひとり丁寧に指導したり、クラス全体で理解を深めたりする等の工夫が必要である。

また、今回の生活実践では、特に兄弟関係において効果が確認されたが、親には活用しにくかったことと、親自身が児童を傷つけていることがわかった。真に家族関係を深めるためには、親も含めて親業についての理解を深め、家族全体でコミュニケーションについて考えていくことができるようにする必要がある。

(2) 定着度

授業後に期間を空けて事後調査を行い、女子 18 名、男子 19 名、計 37 名の回答を得た。授業実践の内容に関する定着度をみる。

まず、『自分の気持ちを上手に伝える方法』について理解できましたか。」という質問に対する児童の回答を図 7 に示す。「よくわかった」「まあわかった」と答えたのは 34 名で、全体の 92% であった。8% にあたる 3 名の児童が「あまりわからない」と答えていたが、「全くわからない」と答えた児童はいなかった。クラス全体としては授業を理解できていたようである。

次に、児童がどの程度理解しているかを調べるために、いくつか項目を挙げ、そのうち、わたしメッセージの方法を選ばせた。正解は、2・3・5 である。() は、それぞれの項目を選んでいた人数を示す。

1. 相手の意見を聞かず、自分の意見を押し通す。(1名)
2. うれしいとき、その気持ちを言葉にして伝える。(30名)
3. 伝える内容はわかりやすく、自分がどう思ったかを正直に伝える。(32名)
4. 相手のことを悪く言って、言い負かす。(2名)
5. 相手が傷つかないように気をつける。(28名)
6. 自分の言いたいことをがまんして、相手の好きなようにさせてあげる。(4名)

これらを見ると、ほとんどの児童が正解を選ぶことができていることがわかる。3 を選んでいる児童が多いことから、この内容が最も児童に印象強く残っていることがうかがわれる。生活実践ではわたしメッセージをうれしいときに活用している児童がいなかったことから、2 は授業中に少し触れただけであったので印象に残らなかったと思われるが、3 に次いで選んだ人数が多かった。理解はしているが、生活実践では活用されていなかったようである。授業で強調した 5 の「相手を傷つけない」が 2 よりも選んだ児童が少なかった。1 や 4 の自己中心的な視点のものを選んだ児童がいることと合わせて考えても、自分の見方や価値観に固執して抜け出せない児童

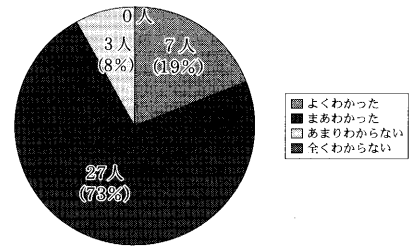


図 7 自分の気持ちを上手に伝える方法の理解度

がいることがわかる。

もう一方の理解度に関する問題を見てみる。これは、わたしメッセージの使い方に関する問題である。ある場面を示し、わたしメッセージを使って相手に伝えられているものを 1 つ選ばせた。以下にそれぞれの項目で選んだ人数を示す。

- 夕飯の用意の手伝いで、テーブルに食器を並べようとしたら、妹がお絵かきをしているので並べられない。お絵かきをやめようとしないう妹に向かって・・・
1. ちょっと、何でどいてくれようしないの？(1名)
 2. 早くお絵かきをやめて、そこをどきなさい！(4名)
 3. そこでお絵かきをしていると、用意ができないから困っちゃうよ。(26名)
 4. そこでお絵かきなんてされると、用意ができてなくてじゃまなんだ。(4名)
 5. 仕方ないなあ。後でお父さんに怒られても知らないよ。(2名)

正解は 3 で選択した児童は 26 名で 70% とかなり多いが、前述のわたしメッセージよりは正解率が低い。授業ではこの部分は 5 分程度の扱いであったため、理解度が低かったと思われる。

以上のことから、ほとんどの児童が「(授業について) わかった」と答え、問題の正解率も高かったため、授業内容に関する児童の定着度は高いと言える。しかし、自分の考えに固執したり、理解が不十分であったりする児童に対して支援を検討する必要がある。

(3) 実生活への活用意欲

『自分の気持ちを上手に伝える方法』を、これからの生活の中で使おうと思いますか。」という質問に対する児童の回答を図 8 に示す。

「ぜひ使いたい」「使いたい」を合わせると 24 人で 67% であった。定着度と比べ、「使いたい」と感じている児童の割合はやや低いと言える。「ぜひ使いたい」「使いたい」と答えた理由としては、「使うと相手が自分の気持ちをすぐに分ってくれるから。」「使うとすっきりした気持ちになるから。」「相手の気持ちを考えることができるから。」等が挙げられていた。中には「大人になって必要になるから。」と答えている児童もあり、これらの児童には、授業の中や生活実践で実感したことから必要性を感じ、これからの生活に生かしていこうとする態度が身についていた。では、残りの 12 名では実生活で生かそうとする意欲が高まらなかったのはなぜであろうか。「あまり使いたくない」「全く使いたくない」と答えた理由では、「面倒くさい

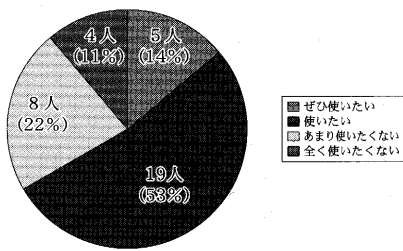


図8 自分の気持ちを上手に伝える方法の活用意欲

から。」が最も多かった。生活実践で効果を自分で確認しても、慣れない方法を使ってまで家族関係をよりよくしようとする意欲が高まらなかったようである。ここに、1時間だけの授業の限界がある。継続して指導を行うとそれだけ効果が高くなるが、今回は1時間だけの授業であったため、理解が深まらず、生活実践も少なかったので、実際に生活で使おうとする意欲が高まらなかったと考えられる。児童が実生活でコミュニケーションスキルを活用しようとする意欲を高め、真に家族とかかわる力を身に付けるためには、継続した指導が必要であろう。その他の「使いたくない」理由としては、「使う機会がないから。」「あまりけんかをしないから。」があった。これは、家庭での対立が少なく、円満であるために、わたしメッセージを活用する必要性を感じなかったためであると考えられる。よりよい関係を築くために、対立したときだけでなく、うれしい気持ちを伝えるときにも活用していく必要性を感じさせたい。また、「使っても絶対無視されるから。」「少し難しいから。」「自分の気持ちを伝えるのが下手だから。」という理由を挙げている児童もいた。生活実践して上手くいかなかった経験や理解度の低さ、自己評価の低さが原因であると考えられる。授業で理解しにくい児童の支援やコミュニケーションスキル獲得のための支援を工夫し、根気強く相手に接する大切さについて感じさせたい。

(4) 家族とのかかわり方の変化

授業前と比べた児童の家族とのかかわり方の変化を図9に示す。授業前と比べ、「家の人とよく話すようになった」について、「とてもそう」「まあそう」を合わせると23名で64%であった。「相手を怒らせたり、いやな気持ちにさせたりすることが少なくなった」で「とてもそう」「まあそう」と答えたのは28名で78%、「意見が対立したとき、相手の気持ちも理解しようとするようになった」で「とてもそう」「まあそう」と答えたのは24名で67%、

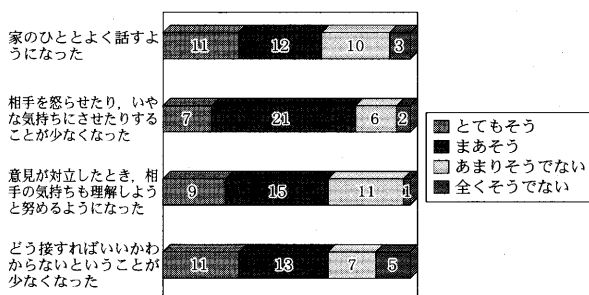


図9 家族とのかかわり方の変化 (人)

「どう接すればいいかわからないということが少なくなった」で「とてもそう」「まあそう」と答えたのは24名で67%であった。児童の家庭での家族との接し方に変化がみられる。特に、「相手を怒らせたり、いやな気持ちにさせたりすることが少なくなった」と感じている児童が約8割おり、これがこの授業で得た一番の成果であると言える。わたしメッセージを学習したことで、相手をいやな気持ちにさせないように思いやって接することができているためであると考えられる。1時間の授業では十分コミュニケーションスキルを身に付けることができなかったが、家族との効果的なコミュニケーション方法を学ぶことで他者の気持ちを理解しようとする余裕が生まれ、それが家族と接する際に態度となって表われるようになったようである。どの項目を見ても、ほぼ7割の児童の家族との接し方により傾向が見られたので、この授業においてある程度高い効果が得られたと言えるであろう。しかし、家族とよりよい人間関係を築こうとする態度が見られない児童も数人いるので、今後、自己受容、他者受容の学習も含め、さらに児童のコミュニケーション能力を育成する授業について検討していく必要がある。

IV. おわりに

家庭内における児童のコミュニケーション能力を育成する授業実践では、ある程度高い効果が見られた。生活実践では多くの児童がコミュニケーションスキルを活用して効果を確認している。このことから、小学生にもコミュニケーションスキルを獲得させることは可能であり、そのために取り入れた親業は児童に適した内容であったと言える。授業実践は、児童がある一定の場面でコミュニケーションスキルを活用することだけに留まらず、家庭生活全体において家族とかかわる態度が向上する効果もみられた。しかし、相手のことを考えようとする児童や、コミュニケーションスキルを実生活で活用しようとする意欲の低い児童もいる。児童に他者を受容するための広い視野を与え、家族とよりよい人間関係を築こうとする意欲を高めていくような支援を検討したい。

文 献

- ・近藤千恵 (2004), 『親児童手帖』, 親業訓練協会
- ・菅原晃子 (1993), 「児童の自立を助けるコミュニケーションスキルを取り入れた授業」, 『広島県高等学校家庭科研究会研究集録第10号』
- ・トマス・ゴードン (1970), 『親業』, サイマル出版
- ・中間美砂子 (2001), 『小学校家庭科学習指導の研究』, 健白社

2005年9月8日受理